

# 大いなる陰謀

2008(平成20)年3月4日鑑賞<試写会・リサイタルホール>

★★★★



監督・製作・出演＝ロバート・レッドフォード／出演＝メリル・ストリープ／トム・クルーズ／マイケル・ペーニャ／デレク・ルーク／アンドリュウ・ガーフィールド／ケヴィン・ダン（20世紀フォックス映画配給／2007年アメリカ映画／92分）

## 第2章

面白くて勉強になる

……レッドフォード、ストリープ、クルーズの「ビッグ3」の共演だが、そんな華やかさに目を奪われてはダメ！ 今何をなすべきか？ いか生きるべきか？ そんな根源的問いかけに真摯に向き合えば、こんな映画に！ 真剣で難解な「議論」が大半を占めるから、バラエティー馴れした日本人は、さてどこまでついていけるのやら……？

### ■話題は、ビッグ3の共演とプラスα

この映画の何よりの話題は、ロバート・レッドフォード、メリル・ストリープ、トム・クルーズというハリウッドを代表するビッグ3の共演だが、さらにプラスαがある。それは第1に、ロバート・レッドフォードが監督をつとめたこと。第2に、トム・クルーズがハリウッドの映画スタジオ、ユナイテッド・アーティスツ社（UA社）の運営者として、この映画の配給を手がけたこと。ハリウッドの一流俳優の活躍の幅広さに感心！

トム・クルーズの政治的立場や主張はよくわからないが、監督がもともと共和党のブッシュ政権の対イラク戦争に批判的な目をもつロバート・レッドフォードだけに、この映画では彼の理想や価値観が至るところに示されている。もっとも、それが観客への押しつけになればナンセンスだが、もちろんそうではなく、それは彼が演ずるステイヴン・マレー教授の発言を通じてのもの。

したがって、この映画ではビッグ3の共演だけに注目するのではなく、このプラスα分にも注目を！

## 3つの物語が登場！ ——その1

この映画は3つの物語から構成され、それが同時並行的に進んでいくというスタイルをとっている。その第1は、8年前の初当選時に「共和党のホープ」として雑誌に紹介された上院議員ジャスパー・アーヴィング（トム・クルーズ）と、その紹介記事を書いたベテランの女性ジャーナリスト、ジャニー・ロス（メリル・ストリープ）とのかなり生臭い会話。

ジャニーはアーヴィング直々のご指名を受け、約1時間単独インタビューできるというチャンスを与えられたのだが、そこでのアーヴィングの提案はかなり計算づくのもの。すなわち、アーヴィングが考案したアフガニスタンでのある軍事作戦をリークする見返りとして、現在の局面を転換させる新作戦を好意的に報道し、世論の支持を得たいというものだった。その作戦とは、少数精鋭の特殊部隊をアフガニスタンの山中に送り込み、高地を占領することによって対テロ戦争を勝利へ導くというものだったが、さてその成功の確率は……？ また犠牲者の予測は……？ また何よりも、撤退が民意となっている中、今なぜそんな新軍事行動を……？

「作戦の達成に手段は選ばない」とアーヴィングは強気一辺倒そして自信満々だが、それに対するジャニーの不安は……？ またベテランジャーナリストとしての突っ込みは……？ 局に戻ったジャニーは上司のハワード（ケヴィン・ダン）との激論を経たうえで、さてどんな決断を……？

## 3つの物語が登場！ ——その2

舞台は変わって、ここはアフガニスタンのバグラム空軍基地。ここでは、特殊精鋭部隊に属するアーネスト（マイケル・ペーニャ）とアーリアン（デレク・ルーク）らが、アーヴィングの発案による高地占領作戦の説明を受けていた。彼らの任務はその高台を占領することだが、彼らの乗っていたヘリコプターは廃棄されているはずの敵の対空砲の銃撃によって被害を受け、アーネストは雪深い山中へ転落し、アーリアンはその救助のため自らヘリを飛び降りることに。

アーヴィングが自信満々にジャニーに語っていたあの作戦は、ハナからつまずいたわけだ。さて、敵の包囲網の中、孤立してしまった2人に刻一刻と迫る運命は……？

## 3つの物語が登場！ ——その3

さらに舞台は変わり、ここはカリフォルニア大学のスティーヴン・マレー教授の部屋の中。呼び出されたのは、優秀な学生として注目していたのに、最近では授業の欠席が続いているトッド・ヘイズ（アンドリュー・ガーフィールド）。長い間学生の進路指導に立ち向かい、有望な学生の将来性に注目していたマレー教授だったが、ここ10～15年間の学生の無気力さには少し焦り気味……？

授業中にすばらしい問題提起をし、堂々と議論を展開していたあの優秀なトッドが、今なぜ女の子とのデートやアルバイトにうつつを抜かし、授業に欠席しているのだろうか……？ それを今日は何としても聞き出し、今後きちんとした生き方をしてもらいたいというのがマレー教授の気持。ところが、マレー教授の話の中で、かつての教え子だったアーネストとアーリアンが志願兵になったことを述べ、「社会の動きに参加することの重要性」を説くと、たちまちトッドは「僕を軍隊にリクルートしようとしているのか？」と反発！

このように、2人の価値観のギャップは相当大きいことは明らかだが、さてそんな2人の議論の行方は……？

## 4つ目(?)の物語は……？

マレー教授の物語にはもう1つ、かつての教え子であったアーネストとアーリアンの学生時代の物語がついているから、この映画は実質は4つの物語……？

アーネストとアーリアンがディベートのテーマとして選んだのは、「参加することの重要性」。ラテン系のアーネストとアフリカ系のアーリアンだが、学業が優秀であれば、大学を卒業した後立派な就職口を見つけることは十分可能。しかし彼らがディベートで熱っぽく語ったのは、国や社会が直面している問題点に自ら志願して参加することの重要性。しかし、それは「言うは易く、行うは難い」ものだ。

ところが、この2人は現実に志願兵として軍隊に入ることを決意したから、マレー教授はビックリ。自分のベトナム戦争への従軍は志願ではなく徴兵だったと説明し、命を失う危険な場に自分を置こうとする彼らを止めようとしたが、彼らの決意は固かった。そんな2人が今、アフガニスタンの山中の高地の中で孤立した状態でとり残されているわけだが、マレー教授がそれを知らないのは当然。アフガン戦争やイラク戦

争にすら全く興味を示さない(?) 今ドキの日本の学生は、こんなアーネストとアーリアンのディベートにおける議論を一体どう聞けばいいの……?

## どれくらいの日本人がこの議論に……?

アーヴィング上院議員とジャーニンの丁々発止の議論は密室での真剣勝負だから、その密度が濃いのは当然。したがって、日本の国会でのくだらない議論やテレビにおける建前論ばかりの討論会とは全く異質のもの。またマレー教授とトッドの議論も、教授と学生という立場を超えた本音のものだから、エッセンスが次々と。これに対して、アフガニスタンの高地では基本的に言葉は不要。しかし、アーネストとアーリアンが学生時代にあのディベートの中で熱く語っていた言葉がそのまま実践されていることは明らかだから、すばらしい。

そこで問題は、今ドキの新聞もロクに読まず、テレビのバラエティー番組にうつつを抜かしているノー天気な日本人が、この議論にどれくらいついていけるのかということ。ちなみにネットを調べてみると、「映画としてはボクにはつまりませんでした。言い換えれば、ボクには難しかったという事ですかね」という感想があったが、これが多くの日本人の感想では……?

もしそうだとすると、ロバート・レッドフォードがこの映画にかけた意欲がアホバカ日本人に対しては空回りとなってしまいうわけだが、それはきわめて残念。

## 何をなすべきか? いか生きるべきか?

私が学生運動をやっていた時の必読文献の1つが、レーニンの『何をなすべきか』。そんな本のタイトルを持ち出すまでもなく、「今何をなすべきか」は人間にとって常に大切な問題点であり、常に自分に問いかけていかなければならない疑問点。ちなみに、この映画のプレスシートには「4つの?」が載っている。それは、①WHAT DO YOU STAND FOR? ②WHAT DO YOU FIGHT FOR? ③WHAT DO YOU LIVE FOR? ④WHAT DO YOU DIE FOR? だが、さてその意味は……?

この映画の登場人物は、①上院議員、②ジャーナリスト、③教授、④兵士、⑤学生と、立場はそれぞれ異なるが、みんな毎日を真剣に生きていることだけはたしか。他方、人間が生まれてくる時代や国や社会を選択できない以上、自分の置かれた時代、国、社会にどう向き合って生きていくのが大切なテーマとなることもたしか。この

映画は、そんな根源的なテーマをスクリーン上での議論という表現方法をもって観客に提示しようとしたわけだ。さて、そんな小難しい(?)映画についての、あなたの感想は……?

## 原題は？

この映画の原題は『LIONS FOR LAMBS』だが、これがまた難しい。「Lamb」とは「Sheep」と同じで、羊のこと。映画の中で語られるセリフによれば、第1次世界大戦中にドイツ軍の兵士たちは、イギリス軍兵士たちの勇敢さをどれほど尊敬しているかについての詩を作ったらしい。そしてそれは、ほとんど、あの何十万人という兵士をひたすら無駄に死なせたイギリス軍の最高司令部への嘲笑に等しかったとのこと。つまり、「このような(愚鈍な)羊たちに率いられたこのような(勇敢な)ライオンたちを、私はほかに見たことがない」という意味だ。

ちなみに、「1頭のライオンに率いられた羊の群れは、1匹の羊に率いられたライオンの群れに勝る」というナポレオンの名言がある。これは指揮官の重要性を説いた格言だが、この映画のタイトルとよく比較検討して味わってみる必要があるのでは……?

2008(平成20)年3月5日記